



今の仕事を始めたのは、「国境なき子どもたち」の友情のレポーターがきっかけです。中学2年生の時に父、中学3年生の時に兄が亡くなって、「家族ってなんだろう」ということが自分のなかでの大きなテーマとなっていた時にレポーターの存在を知り、まったく違う世界で生きている同世代が家族のことをどう思っているのかを知りたくてカンボジアに行きました。そこでは人身売買の被害にあい、保護された子と過ごしました。その子たちが口にするのは自分がこんなに辛い思いをしているということではなく、私は施設にいるけれど家族はなにも食べられていないのではないかと、家族のためにできる仕事はなんだろうと、自分以外の家族のことを気遣っていました。それが一番の衝撃でした。同世代なのに、自分以外に守りたいものがあると、ここまでたくましくあれし、人にやさしくできる、自分しか守ることができない私は脆くて当然だったことに気づかされました。

彼らからたくさんの学びをもらい、家族観も変わりました。なにかお返しできないかと考えましたが、当時は高校生だったので誰かを満腹にできなければ、治療もできない。自分になにかが残っているとしたら、五感で感じたカンボジアを少しでも多くの人たちに伝えることだと思いました。大学生になった時に、写真の一瞬に込める強さに惹かれて、写真で伝えられたらと思うようになりました。

写真を撮る時に意識していることは、北風と太陽の話に例えることが多いです。人が本当に心のコートを脱いでくれる時はいつだろうと考えています。厳しい現状を捉える必要はあると思いますが、そればかりになると、もともと関心のある人はもっと触れたいと思いますが、関心が向けられない方はもうそんなにしんどいことを知らなくていいよ、と心のコートを着込んでしまいます。「この国には、こんなにおいしいものがあるよ」「シリアってもともととても美しい街だっ

## 写真を通して対話する

フォトジャーナリスト **安田菜津紀** さん

「ただよ」と、太陽のようなあたたかさがあると、自然と心のコートを脱ぎたくなくなると思うのです。でも太陽がいかにあたたかいかを実感するには北風の冷たさを知っていくことが必要で、その両者を捉えていくことを大切にしています。

そして、文を綴る時は、その言葉に触れた人が「明日も生きてみようかな」と思えるかどうか、を大切にしています。パッと目をひく過激な言葉ではなく、考える材料、選択肢を提示したり、どこに希望を見いだせるだろうかと一緒に探れるような言葉であったり…を意識するようにしていますね。

\*

写真を撮る現場では悲しいことを目の当たりにすることもあります。写真を媒介にしてつながれる人の輪が広がります。そこが一番の喜びだと思います。写真には、これを知ってくださいというよりもこれを一緒に考えましょう、みなさんはどう思いますか、と私からの投げかけや分かち合いたいという意思を込めています。これに対して自分はこう思った、こういう行動をしてみたいと思ったという、写真をコミュニケーションの起点にして対話ができるとうれしいですね。(談)

やすだ なつき / 1987年神奈川県生まれ。studio AFTERMODE所属フォトジャーナリスト。カンボジアを中心に、東南アジア、中東、アフリカ、日本国内で貧困や災害の取材を進める。東日本大震災以降は陸前高田市を中心に、被災地を記録し続けている。著書に『写真で伝える仕事-世界の子どもたちと向き合って』(日本写真企画)など。

## 特集 優生思想と障害者

あなたは、どう考えますか？  
相模原殺傷事件と優生思想  
優生思想と対峙するために大切なこと  
相模原殺傷事件から考える  
～障害福祉現場からできること  
誰が排除を進めたいのか、手をつなぎ見極めていく  
無条件に生きていていい、存在することに価値がある  
人は平等！誰にだって同じように朝日は差し込むから  
仲間によりそう豊かな文化を  
貧困・差別・偏見の起源

編集部 17  
荒川 智 18  
藤井克徳 20  
  
岩坂正人 24  
小森淳子 26  
中野まこ 27  
土屋晴治 28  
山城完治 29  
唐鎌直義 30

## 連載

自閉スペクトラム症児者の心の理解  
いま手渡したいこと  
～子どもたちに文化を 教師にあこがれと自由を  
【インタビュー】未来への対話

別府 哲 12  
越野和之 34  
暉峻淑子 4

読者会に  
おすすめ

子育てにいきる発達の話 河原紀子 6  
子どもたちの放課後のいま 村岡真治 10  
実践の魅力 井上香里 38  
いもの子の歌 大島宗宏 42

人として 安田菜津紀 1  
ニュースナビ A型事業所解雇問題 2

ピース犬の満腹食べ歩き・私のとっておきクイズ 9 / あーちゃんはこまらない 41 / 世界のトイレにイットイレ 45 / いのちを考える 46 / 教えて、タカシ先生！ 49 / みんなのひろば 50 / BOOK&イベント 52 / 編集後記 53 / 私のお気に入り絵本 裏表紙

イラスト  
近藤未希子、渋谷真理子、たかたりか、ちばかおり、永野徹子  
橋野桃子、藤原こづえ、堀川 真、本村 蓮

## 表紙のことば

インド中部に位置する、テランガナ州。滞在していた村には、日本の認定NPO法人ACEと現地の団体が協力して開いた正規の学校に編入するための補習学校があった。「ブリッジ・スクール」と呼ばれる学校の校舎から、真っ青な制服に、誇らしげに身を包んだ少年、少女たちが顔をのぞかせる。彼らは綿花畑の労働などで、公立校に通えていなかった子どもたちだ。NGOや活動をともにする地元の人たちによって少しずつ村の意識も変わり、今ではさらなる進学をめざす子どもたちも増えている。こうして日々学び、視野を広げていく子どもたちが、やがて村の未来を担っていくのだ。